

日蓮大聖人御書全集

うえのどのごへんじ

上野殿御返事

つちもちくよう こと

（土餅供養の事）

新版
1837
〜
1840

うえのどのごへんじ つちもちくよう こと

上野殿御返事（土餅供養の事）

ぶんえい ねん がつ にち さい なんじようとときみつ

文永11年('74) 11月11日 53歳 南条時光

せいじんふたつつ こうじひとこ こんにやくじゅうまい やまのいもひとこ ごぼうじつそく

聖人二管・柑子一籠・蒟蒻十枚・薯蕷一籠・牛房十束、

しゅじゅ ものおく た そうろう

種々の物送り給び候。

とくしよう むしよう にどうじ ほとけ すな もちい くよう

徳勝・無勝の二童子は、仏に沙の餅を供養したてまつ

えんぶだいさんぶん いち しゅ あいくだいおう

りて、閻浮提三分が一の主となる。いわゆる阿育大王これ

じゅどうぼさつ じょうこうぶつ いつくき れんげ くよう

なり。儒童菩薩は、錠光仏に五茎の蓮華を供養したてまつ

ほとけ いま きょうしゅしやくそん

りて仏となる。今の教主釈尊これなり。

ほけきょう だいし い ひとあ ぶつどう もと いっこう なか

法華経の第四に云わく「人有つて仏道を求めて、一劫の中

がつしよう わ まえ あ むしゆ げ ほ

において、合掌し我が前に在つて、無数の偈をもつて讃め

さんぶつ よ ゆえ むりよう くどく え じきようしや

ば、この讃仏に由るが故に、無量の功德を得ん。持経者を

たんみ ふく かれ す とうろんぬん

歎美せば、その福はまた彼に過ぎん」等云々。

もん こころ ほとけ いっちゆうこう あいだくよう

文の心は、仏を一中劫が間供養したてまつれるより、

まつだいあくせ なか ひと 強 憎 ほけきよう ぎようじや

末代悪世の中に、人のあながちににくむ法華經の行者を

くよう くどく 勝 説 たも 誰 ひと

供養する功德はすぐれたりとかせ給う。たれの人のかか

僻 ごこと 仰 うたが 思 そうら

るひが事をばおおせらるるぞと疑いおもい候えば、教主

しやくそん われ 仰 そうろう うたが しん

釈尊の我とおおせられて候なり。疑わんとも、信ぜん

みこころ 任

とも、御心にまかせまいらする。

ほとけ おんした

おもて おお

さんぜんだいせんせかい

仏の御舌は、あるいは面に覆い、あるいは三千大千世界

おお

しきくきようてん

つ たも

か こ おんのんごう

に覆い、あるいは色究竟天までに付け給う。過去遠々劫よ

いちごん もうご

りこのかた、一言も妄語のましまさざるゆえなり。されば、

きよう い

しゆみせん

崩

だいち

打 返

ある経に云わく「須弥山はくずるとも、大地をばうちかえ

ほとけ

もうご

説

ひ にし

出

すとも、仏には妄語なし」ととかれたり。日は西よりいず

たいかい

しお

満 干

ほとけ

みこと

誤

とも、大海の潮はみちひずとも、仏の御言はあやまりなし

とかや。

うえ

ほけきよう

たきよう

勝

たま

たほうぶつ

その上、この法華経は他経にもすぐれさせ給えば、多宝仏

しようみよう

しよぶつ

した

ぼんでん

付

たも

いちじいってん

もうご

も証明し、諸仏も舌を梵天につけ給う。一字一点も妄語は

そろう

候 まじきにや。

うえ との

幼

こしんぶ

もののふ

その上、殿はおさなくおわしき。故親父は、武士なりし

強

ほけきよう

たつと

たま

りんじゅうしようねん

かども、あながちに法華経を尊び給いしかば、臨終正念

由

承

なりけるよしうけたまわりき。

おや あと

継

たま

きよう

ごしんよう

その親の跡をつがせ給いて、またこの経を御信用あれば、

こしよりよう

くさ

陰

よろこ

思

故聖 靈いかに草のかげにても喜びおぼすらん。

生

嬉

きよう

あわれ、いきておわせば、いかにうれしかるべき。この経

たも ひとびと

たにん

おな

りようぜん

詣

合

たも

を持つ人々は、他人なれども同じ 靈山へまいりあわせ給う

こしよりよう

との

おな

ほけきよう

しん

なり。いかにいわんや、故聖 靈も殿も、同じく法華経を信

たま

おな

う

たも

じさせ給えば、同じところに生まれさせ給うべし。いかな

たにん　ご　ろくじゅう

おや　おな　白　髪　ひと

れば、他人は五・六十までも親と同じしらがなる人もあり、

われ　若　み　おや　早　遅　きょうくん　承

我わかき身に親にはやくおくれて、教訓をもうけたまわら

みこころ　内　推　量　涙　止

ざるらんと、御心のうちおしはかるこそ、なみだもとまり

そちら

候わね。

にちれん　にほんこく　助　深　思

そもそも、日蓮は、日本国をたすけんとふかくおもえど

にほんこく　じょうげばんにんいちどう　くに　亡　もち

も、日本国の上下万人一同に、国のほろぶべきゆえにや用い

うえ　たびたび　怨　ちから　及　さんりん

られざる上、度々あだをなさるれば、力およばず、山林に

交　そちら　だいもうここく　寄　そうろう　もう

まじわり候いぬ。大蒙古国よりよせて候と申せば、申せ

おんもち

哀

みなひと

しことを御用いあらばいかなんどあわれなり。皆人の

とうじ

壺岐

対馬

たま

思

当時のゆき・つしまのようにならせ給わんこと、おもいや

そうら

涙

止

り候えば、なみだもとまらず。

ねんぶつしゅう

もう

ぼうこく

あくほう

戦

だいたい

念仏宗と申すは亡国の悪法なり。このいくさには、大体、

ひとびと

じがい

そうら

人々の自害をし候わんずるなり。

ぜんどう

もう

ぐち

ほっし

弘

始

じがい

そうろう

善導と申す愚癡の法師がひろめはじめて自害をして候

ねんぶつ

能

もう

じがい

こころ

しゅつたい

そうろう

ゆえに、念仏をよくよく申せば自害の心の出来し候ぞ。

ぜんしゅう

もう

とうじ

じさいほっしとう

てんま

しよい

きょうげ

禅宗と申す当時の持斎法師等は天魔の所為なり。「教外

べつでん

もう

かみ

ほとけ

もう

物

狂

に別伝す」と申して、「神も仏もなし」なんと申す、ものぐる

あくほう

わしき悪法なり。

しんごんしゅう もう しゅう

もと げれつ きよう

そうら

おうわく

真言宗と申す宗は、本は下劣の経にて候いしを、誑惑

ほけきよう

すぐ

もう

おお

ひとびと

だいし

して「法華経にも勝る」なんと申して、多くの人々、大師・

そうじよう

にほんこく

だいたいじゅうまん

かみいちにん

僧正なんどになりて、日本国に大体充滿して、上一人よ

こうべ

傾

だいいち

ひがごと

そうろう

むかし

り頭をかたぶけたり。これが第一の邪事に候を、昔よ

いま

至

ちじん

でんぎようだいし

もう

ひと

り今にいたるまで智人なし、ただ伝教大師と申せし人こそ

知

そうら

詳

仰

しりて候いしかども、くわしくもおおせられず。さては、

にちれん

知

ごしらかわ

ほうおう

だいじようのにゅうどう

日蓮、ほぼこのことをしれり。後白河の法皇の太政入道

責

たま

おきのほうおう

鎌

倉

負

たま

にせめられ給いし、隠岐法皇のかまくらにまけさせ給いし

皆 しんごん あくほう

故

かんど

ほう 渡

こと、みな真言の悪法のゆえなり。漢土にこの法わたりて

げんそうこうてい 滅

たも

あくほう

鎌

倉

くだ

とうじ

玄宗皇帝ほろびさせ給う。この悪法かまくらに下つて、当時

流

行 そうじよう

ほういんとう

かまくらにはやる僧正・法印等はこれなり。

ひとびと

戦

じようぶく

ひやくにち

戦

これらの人々このいくさを調伏せば、百日たたかうべ

とおか

縮

とおか

いちにち

攻

きは十日につづまり、十日のいくさは一日にせめらるべし。

いまはじ

もう

にじゅうよねん

あいだ

こえ

惜

今始めて申すにはあらず。二十余年が間、音もおしまず

呼

そちら

おんふみ

よばわり候いぬるなり。あなかしこ、あなかしこ。この御文

だいじ

こと

書

そうろう

能

ひと

読

聞

は大事の事どもかきて候。よくよく人によませてきこし

ひと

謗

そちら

思

ほっしとう

めせ。人もそしり候え、ものともおもわぬ法師等なり。

きようきようきんげん

恐々謹言。

ぶんえいじゅういちねんたいさいきのえいぬじゅういちがつじゅういちにち

文永十一年太歳甲戌十一月十一日

にちれん

日蓮

かおう

花押

なんじょうしちろうじろうどのごへんじ

南条七郎次郎殿御返事